

## 修士学位論文内容要旨 Abstract

専攻 Major	海洋環境保全学専攻	氏名 Name	河本 幸太
論文題目 Title	帆船実習が参加者に及ぼす影響についての調査研究		

海を利用した教育の一つに帆船教育がある。帆船教育は現在、船員養成以外では主に青少年を育成する目的として実施されているが、日本の帆船数の減少や船員養成のカリキュラムにおいて帆船実習が必修でなくなるなど、その必要性に疑問を抱く声もある。帆船実習が参加者に及ぼす影響に関する先行研究としては、EQ 行動特性やライフスキルの向上といった効果が報告されているが、それらの調査は帆船実習前後での差を検討するのみにとどまり、また対照群との比較を行なったものは皆無であった。テキストマイニングを手法とした研究においても、実習の感想からポジティブ感について調査したものであり、充分とは言えない。そこで本研究では、対照群を設け、質問紙調査により、帆船教育の及ぼす影響について検討する（調査1）とともに、自由記述式質問紙調査を行いネガティブな側面も含め帆船教育の及ぼす影響を検討する（調査2）ことを目的とした。

調査1の対象は、実験群として海王丸遠洋航海実習に参加した実習生73名、対照群として東京海洋大学スポーツI履修生132名である。実験群の調査時期は日本出港前（4月14日）、ホノルル到着時（5月13日）、日本帰港時（6月8日）の計3回とした。日本からホノルルまでの往路は帆走、ホノルルから日本までの復路は機走であった。対照群の調査時期は、実験群の調査時期とほぼ同様の時期になるように設定し、第1回目を4月8日、第2回目を5月13日、第3回目を6月10日とした。質問紙は氏名、年齢、性別、所属及び、3因子18項目によって構成されている協同作業認識尺度（長濱ら2009）と、5因子28項目で構成されている対人関係性尺度（高井2009）を含む両面印刷A4用紙1枚で構成した。調査2の対象は、海王丸遠洋航海実習に参加した実習生73名とした。調査時期は日本帰港時（6月8日）とした。質問紙は片面印刷A4用紙1枚で構成されており、調査内容は氏名、年齢、性別、所属及び、海王丸遠洋航海実習の感想を問うものとした。

調査1では、協同作業認識尺度と対人関係性尺度の各因子について、群（実験群・対照群）と時期（3回の調査時期）を要因とする2要因分散分析を行なった。その結果、対人関係性尺度の「自己優先因子」にのみ、対照群の2回目から3回目にかけて得られた得点が有意に上昇し、実験群より対照群の方が3回目において得られた得点が有意に高かった。その他の因子では、協同作業認識尺度の「互惠懸念因子」と対人関係性尺度の「ありのままの自己因子」は両群とも日本出港前からホノルル到着時にかけて、日本出港時から日本帰港時にかけて得られた得点が有意に上昇した。対人関係性尺度の「他者依拠因子」と「他者受容因子」は、実験群より対照群の方が得られた得点が有意に高かった。

調査2では、テキストマイニングにて抽出された名詞から「帆船実習における作業はポジティブな結果をもたらした」と解釈した。また、ポジティブカテゴリから「実習の満足感や楽しさ」「自身の能力向上や仲間に対する賞賛」などが読み取れた。ネガティブカテゴリにおいては「失敗や高所作業に対する恐れ」「船内生活に対する不満」「仲間に対する不信感」などが解釈された。しかし原文を参照すると49件中41件で、ネガティブカテゴリに分類された語句の後に逆接の接続詞が続き、ポジティブカテゴリに分類された語句が続く回答や、ネガティブな語句が含まれているが、文としてはポジティブな回答などがあった。そのことから、ネガティブな感情を抱きながらも、多くの調査対象者ではそれらを克服し、ポジティブ感に変わっていることが読み取れた。

調査1においては、帆船実習が参加者に及ぼす影響は確認できなかったが、調査2ではテキストマイニングを使用することで帆船教育の及ぼす影響を確認することができた。